

序

高齢化社会の到来とともに、診療の対象も75歳以上の後期高齢者の患者さんが非常に多くなってきました。

高齢になるにつれ生体にはさまざまな変化が出てきます。なかでも腎機能や肝機能といった薬物の代謝と関連した臓器が障害されてきます。また心機能や自律神経機能も低下するために血圧の変動も大きくなります。また認知機能に障害がみられる患者さんも増えてきて薬の服薬アドヒアランスも悪くなってきます。

薬の安全処方が治療学の基本であることに議論の余地はありません。したがって、生体の生理機能が衰えた高齢者に対しては、当然特別な注意が必要です。

特に高齢者を診療するうえで重要なことは、病態や社会的背景の多様性を考慮することです。エビデンス、あるいはそれを元に作成されたガイドラインは、均一な集団を元にした治療の結果や指針に過ぎません。それらは参考にはなりますが、その結果をそのまま個々の高齢者に当てはめるととんでもない誤りを犯すことになりかねません。

特に後期高齢者の診療にあたって、担当医に求められることは、個々の患者さんの病態を把握して、治療のあり方を考えることです。

本書では、高齢者医療に長年の経験をもつ選りすぐりの執筆者に、高齢者に対する安全処方のコツを伝授してもらいました。特に本書の執筆者の多くが所属する東京都健康長寿医療センターは、高齢者専門医療機関としてわが国の高齢者医療をリードしてきた実績があります。本書には他の書物では得られない宝物が詰まっていますので、これからの高齢者診療にあたって皆さんの座右の書として活用していただければ、編集者としては望外の喜びです。

2012年5月

東京都健康長寿医療センター顧問

桑島 巖